

白い花の辛夷

中 村 喬

なにげなく唐の白居易の詩を見ていて、おやっ、と思った。その「代春贈」詩に「辛夷の花は白く柳の梢は黄なり」とあったからである。「辛夷」は、すでに『楚辭』九歌に見られる樹木¹⁾で、その花の色はたしか紫色だったと記憶していた。前稿「宋詩に見る酴醾花」(『學林』五五號)以来、花木に興味を持つようになっていた私は、この白い花の辛夷というのが妙に氣になって、調べてみた。その結果、文献資料に現れる「辛夷」の名は、今日われわれが稱する「辛夷」に限らず、幾つかの種類を包括していることが分かった。それを大別すると、一つには現在の辛夷、二つには現在の木蘭を含む木蘭類、三つには現在の玉蘭、の三種である。本稿では、これらのことについてを述べてみたいと思う。

一、「辛夷」について

1、辛夷



今日「辛夷」と呼ばれる花木は、『中國高等植物圖鑑』(第一冊七八八頁)に據ると、木蘭科木蘭屬の落葉灌木で、學名は「*Magnolia liliflora* Desr」、樹高は大きいもので約5メートル。花は葉より先か、または葉と同時に開く。鐘形をした大形の花で(左圖)、花被片は9枚(外輪、中輪、内輪各3枚)、花瓣は内側が白色、外側が紫色または紫紅色をしており、枝頂に單獨で開く。原産地は湖北だが、現在は各地で栽培されているという。花期は3~4月である。

わが國ではこれを「トウモクレン(唐木蓮)」と稱する。中國から渡來したからである。わが國の分類名ではモクレン科モクレン屬の落葉低木とされ、學名は中國と同じである。

なお、わが國では「辛夷」を「コブシ」と訓じるが、このコブシはわが國固有のモクレン科モクレン屬の落葉高木「*Magnolia kobus*」で、これに漢名の「辛夷」を當てたものであって、中國の辛夷とは異なる。このコブシも3月から5月にかけて開花するが、花は白色である。

中國の文献上「辛夷」は、「辛雉」、「侯桃」、「木筆」、「迎春」、「房木」などとも稱する。これら別名の由來について、「辛雉」は漢の揚雄の「甘泉の賦」に「新雉²⁾ 林薄に列なる」とあるに據り、「侯桃」「木筆」「迎春」については本草に、「花未だ發かざる時、苞は小さな桃の子の如くして毛有り、故に侯桃と名づく³⁾」といい、「[花]初發のとき筆の如し、北人呼びて木筆と爲す⁴⁾」といい、「其の花最も早し、南人呼びて迎春と爲す⁵⁾」という。ただ「房木」についての説明はない。これら

は辛夷の別名とされるものの、「辛雉」「侯桃」「房木」は殆ど用いられることはない。「木筆」と「迎春」、殊に木筆は頻繁に見られる。

ちなみに、「辛夷」の名について明の李時珍は、「夷は萸^{つばな}のことで、その苞（花蕾）が初めて生じたとき、萸（茅の花穂）のようであり、また味が辛なので、辛夷というのだ」（『本草綱目』木部、香木類「辛夷」という⁶⁾。

2、辛夷の花と色

文献資料における辛夷は、古くは『楚辭』九歌「湘夫人」篇に「辛夷の楣」（楣は門戸上の横梁）とあり、「山鬼」篇に「辛夷の車」とあるように、木材として認識されていたにすぎない。その花に意識が向けられるようになるのは唐代で、盛唐の王維の「辛夷塢」詩に「木末の芙蓉花」（『王右丞集』卷一三）、杜甫の「偃仄行」に「辛夷始めて花するも亦た已に落つ」（『全唐詩』卷二一七）、錢起の「暮春歸故山草堂」詩に「辛夷の花盡き杏の花飛ぶ」（『錢仲文集』卷一〇）などで見られる⁷⁾。その花の形は主として蓮^{はす}の花に喩えられ⁸⁾、その色は紫色（花瓣外側の色）とするのが一般であるが、また紅色、粉紅色ともされる。たとえば、北宋末の『本草衍義』（卷一三）「辛夷」に、「紅、紫二本有り。一本は桃花の色の如き者、一本は紫の者なり」と、紫色とともに桃花色（粉紅色＝ピンク）のものがあるという。ここにいう「紅」は粉紅色のことだが、紅色そのものも、唐の白居易が杭州靈隱寺の辛夷を詠った「題靈隱寺紅辛夷花戲酬光上人」詩（『白氏長慶集』卷二〇）に見られ、句に「紫の粉筆は尖に火焰を含み、紅の胭脂は小蓮の花を染む」とある。すなわち、粉筆（化粧筆）のような蕾は紫色で、その尖端は化粧筆の穂先^{はす}が紅を含んだように紅色を帯びていて、蕾が開くと小輪の蓮のようなその花は、胭脂のように紅い色をしていると⁹⁾。また明の田汝成の『西湖遊覽志餘』（卷二四、委巷叢談）に、「辛夷の花の、鮮紅にして杜鵑躑躅の花に似たるは、俗に紅石薔と稱する者、是也」とあり、俗に紅石薔と稱される辛夷も鮮紅色だった。杜鵑躑躅とは「杜鵑花」のことで、二、三月の杜鵑（ほととぎす）が鳴く頃に花が開く躑躅である。この躑躅は鮮紅色なので「紅躑躅」ともいう。ただ、辛夷の花の色を「紅」と詠じるものは多いが、しかし上掲『本草衍義』の紅が粉紅色を意味したように、それらの紅すべてが実際に鮮紅色を意味するものではない。唐の皮日休の「揚州看辛夷花」詩に「今に至りて猶未だ全ての紅を放たず」（『全唐詩』卷六一三）とあるが、この詩に和した陸龜蒙の「和揚州看辛夷花次韻」詩に「等閒の桃杏 即ち紅を争う」（『甫里集』卷八）という。桃の花と杏の花とは、多少の濃淡はあるにしても、ともに粉紅色であるから、ここにいう「紅」は粉紅色を意味し、これと「紅を争う」辛夷も粉紅色だったはずである。いったい紫色は、色の三原色でいえばマゼンタ（紅紫色。紫を帯びた赤）とシアン（青緑色）の混合から成る。だからマゼンタが強く出れば鮮紅色に近く、その色が淡くなれば粉紅色となり、薄い紫色ともなる。今日わが国における辛夷（トウモクレン）にも、紅色の強いもや薄い紫色のものが見られる。

辛夷の詩において、花の内側の色にまで及んだものは見出さないが、明の『遵生八牋』（燕閑清賞箋下、四時花紀）「辛夷花」に「花は蓮の如く、外は紫にして内は白」とある。この辛夷は、文末に「就きて玉蘭を接ぐ可し」といっているから、今日いう辛夷と見てよい。「玉蘭を接ぐ」については、三の「辛夷と玉蘭」の條で述べる。

なお、『證類本草』「辛夷」に引く五代毛蜀の『蜀本草』の「圖經」に「花の色は白くして紫を帯ぶ」（「臣禹錫謹按」條所引）とあるのは、内が白く外が紫であることをいうが、この辛夷は、二の「辛夷と木蘭」で述べるように、今日の辛夷（唐モクレン）とは別である。

3、灌木の辛夷

今日の辛夷は^{△△}灌木（低木）である。『本草綱目』に引く南齊頃の書『名醫別錄』に、「辛夷は、漢中、魏興、梁州の川谷に生ず。其の樹は杜仲に似て、高さ丈餘」とある。これによるとその高さは丈餘（3メートル余り）であるから、この辛夷は^{△△}灌木といえる。ただ「杜仲に似て」とある杜仲は、高さ二〇メートルにも達する喬木であるし、「漢中、魏興、梁州」（陝西省南部）は今日の辛夷の分布地ではないので、いささか疑問ものころが、『太平御覽』に引く所も「一丈餘」とある¹⁰⁾ので、一應誤筆はないものとする、今日の辛夷に繋がるものである。また南宋初の胡仔の『漁隱叢話』（後集卷一〇）に、辛夷の別名とされる木筆と迎春とを取り上げ、木筆と迎春は別種であるとする説を立てているが、そこに「木筆の色は紫、……^{△△}叢生にして、二月方に開く」といっている。時代は下るが、明の宋詡の『宋氏養生部』（樹畜部二）種花卉法「木筆」に、「^{△△}灌生にして、花は紫と白、深淺の二種あり。即ち辛夷なり」という。叢生、灌生は灌木のことであるし、花の色が紫、または紫（外）と白（内）であるということは、今日の辛夷を指すと見てよいだろう。

二、「辛夷」と「木蘭」

1、喬木の辛夷

初唐の蘇恭の『新修本草』（木部上品）「辛夷」にいう、

其の樹、^{△△}大さは連抱、^{△△}高さは數仞、葉は柿の葉より大なり。所在皆有。

また五代毛蜀の『蜀本草』の「圖經」にいう、

樹は高さ數仞、葉は柿の葉に似て狭長。正月、二月に花す。〔花の未だ開かざる時は〕著毛の小桃に似たり。〔花の〕色は白くして紫を帶ぶ。花落ちて子無し。夏の杪に復た花〔芽〕を著く、小筆の如し。又た一種あり、三月に花開き、四月に花落つ。子は赤くして相思子（唐小豆）に似たり。花葉は子無き者と同じ。（『證類本草』「辛夷」の「臣禹錫謹按」條所引）

この「圖經」の、「正月、二月に開花し、花が落ちても子はならない」と、「三月に開花し、四月に花が落ちて、相思子に似た赤い子をつける」とものに分けて二種とする説は、北宋の掌禹錫の『嘉祐補注本草』（『證類本草』「辛夷」所引）において、「實を結ぶと結ばないとは、その樹の幼壯によるもので、二種あるわけではない。開花時期の早晩も、地方差にすぎない」と否定されているが、いずれにせよ、ここにいう辛夷は高さが數仞もあるのである。上記『嘉祐補注本草』には、當時の御苑中にあった辛夷が紹介されているが、それは「高さは三、四丈」（約9～12メートル）だったという。要するに、ここにいう辛夷は明らかに^{△△}喬木であって、^{△△}灌木である今日の辛夷とは異なる。詩においても、中唐の韓愈の「感春五首」の第一首に「辛夷の高き花 最も先に開く¹¹⁾」、北宋の韓琦の「辛夷花」詩に「辛夷 高き花を吐く」（『全芳備祖前集』卷一九、花部、辛夷花）、南宋の陸游の「春遊」詩に「辛夷 高き枝に發く」（『劍南詩藁』卷一四）、金の馬國定の「懷高圖南」詩に「高き花 辛夷を見る」（『中州集』卷一）、元の郭翼の「絶句」に「辛夷 高く開きて上頭に満つ」（『草堂雅集』卷九）と、その花の高さが詠われている辛夷は、喬木であったと見てよい。では、喬木の辛夷とは何なのか。それは「木蘭」である。

2、木蘭

「木蘭」について『羣芳譜詮釋』の伊欽恒氏は、「木蘭科の^〇落^〇葉[△]喬[△]木[△]で、學名は *Magnolia liliflora* である」(花譜「木蘭」という。この學名は、すでに見た「辛夷」の學名と同じで、故に『中國高等植物圖鑑』には「木蘭」の項目が設けられていない。辛夷と木蘭の學名が同じなのは、辛夷は木蘭の変種と見做されるからであろう。わが國でもモクレン科モクレン屬の^〇落^〇葉[△]高[△]木[△]で、學名は辛夷と同じとされているが、ただ、辛夷を「トウモクレン」(唐木蓮)と呼び、木蘭は「シモクレン」(紫木蓮)と稱して兩者を區別している。その花は辛夷と同じで、花瓣の外側は紫色(紫紅色)、内側は白色である。そのことは上掲『蜀本草』「圖經」の喬木の辛夷が、「色は白くして紫を帯びる」花であったのと一致する。

木蘭の名が最初に見られるのは、辛夷と同じく『楚辭』で、その「離騷」篇に見られる¹²⁾。『楚辭』の木蘭が今日の木蘭(紫モクレン)と同じかどうかは別として¹³⁾、以來、辛夷とともにその名が見られ、『證類本草』や『本草綱目』、また『羣芳譜』などは、辛夷と木蘭の兩項を立てている。このことについては、次條の3で述べる。

唐以前の木蘭は、辛夷がそうであったように、殆どが木材としての記載である¹⁴⁾(本草は除く)。これが唐代になると観賞花としての木蘭が見られるようになる。中唐の白居易の「戲題木蘭花」詩にいう、「紫房 日照りて臙脂^{ひら}拆き、素豔 風吹きて膩粉開く」(『白氏長慶集』卷二〇)と。すなわち、「紫色をしていた蕾が臙脂^{くちべに}のような色の花瓣を開き、さらに開くと内側の白さは膩粉^{おしろい}のようだ」というのである。この表現は、前節「辛夷」の條で見た同人の「題靈隱寺紅辛夷花戲酬光上人」詩に「紫の粉筆は尖に火焰を含み、紅の臙脂は小蓮の花を染む」とあったのと同じであるが、ここではさらに内側の白さにまで言い及んでいる。木蘭の花は、單なる紫色より紅色の強い方が貴ばれたようで、晩唐の段成式の『酉陽雜俎』に、次のような話がある。「文宗の太和年間のこと、東都(洛陽)の敦化坊の民家に、深紅色の花をつける一本の木蘭の樹があった。それを桂州觀察使李渤の家守が五千錢で買って移植した。しかし家が洛水の北にあったため、年が経つとともにその花は紫色になってしまった¹⁵⁾」と。

だいたい木蘭の花は、明の『本草綱目』(木部、香木類)「木蘭」に「其の花、内は白く外は紫なり」とあり、王象晉の『羣芳譜』(花譜)「木蘭」にも「花は辛夷に似て、内は白く外は紫なり」とあるように、外側は紫色で内側は白色なのだが、辛夷と同じく外側の色を以て、一般には紫花とされる。

3、辛夷と木蘭

唐の白居易は「戲題木蘭花」詩に、前掲句に續けて「怪み得たり獨り脂粉の態に饒^{めた}かなるを、木蘭曾に女郎と作りて來る」と木蘭を、脂、粉で化粧をした女郎に喩え、これを女郎花といった¹⁶⁾。以來「女郎花」は木蘭の異名となるが、宋の陸游はこの「女郎花」を「辛夷」の花の異名とする。たとえば「病中觀辛夷花」詩に「粲粲たる女郎花、忽として庭前の枝に満つ」(『劍南詩藁』卷七六)という。また「春晚雜興」詩の「閒に女郎花を見る」の句に自注して、「唐人、辛夷を謂いて女郎花と爲す」(前同書卷三二)と、明らかに白居易の上掲詩の木蘭を指して、辛夷といている。すなわち陸游は、木蘭と辛夷とは同じとしているのである。

本來なら喬木である木蘭と、灌木である辛夷とでは見た目も異なるはずだが、これを同じとするには、まず、その花が同じということがあろう。しかし、さらに本草的分類が作用していると思う。いったい本草書類では、辛夷と木蘭とを項を別に立てているが、その區別は主として薬に用い

る部分に依るもので、喬木と灌木との違いに基づくものではない。すなわち薬用として「樹皮を取るもの」は木蘭、「花蕾を取るもの」は辛夷とする。故に今日では「木蘭」とすべき喬木であっても、薬用として花蕾を取るものは「辛夷」に入れられる。

いったい木蘭屬は、その種が極めて多い。『中國高等植物圖鑑』によると、中國の木蘭科には11の屬があり、そのうち木蘭屬には約30の種があるという。故に一概に木蘭といっても、わが國に渡來した木蘭（紫モクレン）のみではない。例えば本草書で「木蘭」に入れられる「樹皮を取るもの」としては、「西康玉蘭」や「玉葉玉蘭」がある。また本草書で「辛夷」に入れられる「花蕾を取るもの」としては、「武當木蘭」や「望春玉蘭」がある。北宋の掌禹錫の『嘉祐補注本草』（『證類本草』木部上品「辛夷」所引）に、當時の御苑中にあった辛夷について、次のように述べられている。

今、苑中に高さ三、四丈の樹があつて、花や葉など〔蜀本草の〕圖經が説く所とまったく同じである。ただ、樹の身は〔『新修本草』にいうほど太くはなく〕直徑二尺ほどである。正月、二月に紫と白の花を開き、花が落ちると葉が生じる。夏の初めにはもう小筆のような花〔の芽〕が生じ、秋冬を経て、葉が落ちる頃には、だんだん膨らんで、うぶ毛をつけた小さな桃のようになり、次の年の正月、二月にやっと開花する。この樹は興元府（陝西南部）から獻上されたもので、當初はわずか高さ三、四尺で、花は咲くが子はならなかった。それが、植えてから二十年餘り経つ今では實を結ぶようになった。このことから考えて、植えてから年の浅いものは子がないのであつて、二つの種類があるわけではない。またその開花時の早晩は、地方差にすぎない。（要用のみ）

（今苑中有樹高三四丈、花葉一如圖經所説。但樹身徑二尺許、……。正月二月花開紫白色。花落復生葉、至夏初還生花、如小筆。經秋歷冬、葉落花漸大、如有毛小桃、至來年正月二月始開。初是興元府進來、其樹纔可三四尺、有花無子……。樹種經二十餘載、方結實。以此推之、卽是年歲淺者無子、非有二種也。其花開早晩、應各隨其土風爾。）

この辛夷は、三四丈ある喬木であること、花は葉に先だつて開くこと、花瓣が紫（外）白（内）であること、興元府（陝西省南西部）から獻じられたものであることなどから見て、今日の「武當木蘭」であつたと考えられる。「武當木蘭」は木蘭科木蘭屬の落葉喬木で（學名 *Magnolia sprengeri* Pamp.）、葉に先んじて開花し、花の外側は紫紅色で、湖北、湖南、四川から甘肅、陝西南部に分布する。またその花蕾は辛夷として薬用とされるから、本草書的には辛夷に入る。

三、「辛夷」と「玉蘭」

1、白い花の辛夷

冒頭で述べたように、中唐の白居易の「代春贈」詩に、「山は晴嵐を吐き水は光を放つ、辛夷の花は白く、柳の梢は黄」（『白氏長慶集』卷一六）とある。辛夷の花は白いというのである。下つて宋の王安石の「寄吳成之」詩に「辛夷は屋角に香雪を搏ち、躑躅は岡頭に醉紅を挽く」（『臨川文集』卷二四）、「烏塘」詩に「試みに問う春風何れの處をか好せん、辛夷雪の如き柘岡の西」（前同卷三〇）、「讀書堂」詩に「辛夷の花發きて白きこと雪の如し」（宋、俞德鄰『佩韋齋輯聞』卷二所引）という。王安石のこれらの詩は、彼の郷里であり、また母方吳氏の居所がある撫州臨川縣（江西省撫州市臨川區）西の柘岡を詠じたもので、柘岡の西の路はこの辛夷の竝木で知られた所であつた。「柘岡」詩に「柘

岡の西路 花雪の如し』（『臨川文集』卷三〇）とあるのもその辛夷の花をいったものであるが、ともに「香雪」といい、「雪の如し」「白きこと雪の如し」といって、その花の白さを詠っている。いったい辛夷の花は、前條で見たように、内側こそ白いが、外側は紫または紫紅色であって、これを白い花とは言わないだろう。これはいったいどういうことなのか。

この疑問は、すでに南宋孝宗時の袁文が呈している。すなわち『甕牖閒評』（卷七）に、王安石の「烏塘」詩と「寄吳成之」詩の句を引いて、「是の如くんば、則ち辛夷の花は白色也。唐書注¹⁷⁾に乃ち云う、辛夷は即ち木筆なりと。木筆は卻た是れ紫の花なり。深く未だ曉らざる所なり」と。

2、玉蘭



時代は下るが、明萬曆時の高濂の『遵生八牋』（卷七、起居安樂牋上）「高子花謝詮評」に、「玉蘭花は、辛夷花なり。素艷清香、芳鮮目を奪う」という。また『本草綱目』（木部、香木類）の「辛夷」に、「亦た白色なる者有り、人呼んで玉蘭と爲す」、明末の盧之頤の『本草乘雅半偈』（卷二）に「辛夷」を論じて、「白花の者呼びて玉蘭と爲す」、文震亨の『長物志』（卷二）「玉蘭」に、「古人辛夷と稱するは、即ち此の花なり」という。そうすると、「白い花の辛夷」とは「玉蘭」をいうことになる。

「玉蘭」は、木蘭科木蘭屬の落葉喬木で（學名は *Magnolia denudata* Desr.）、葉が生じるに先だつて鍾形をした大形の白い花を開き、花被片は9枚（外輪、中輪、内輪各3枚）である（左圖）。長江流域から東部に分布するが、現在では各地で栽培されている（『中國高等植物圖鑑』第一冊七八六頁）。わが國ではこれを「ハクモクレン」（白木蓮）と稱し、モクレン科モクレン屬に屬する。花期は2～3月である。

ではなぜこの玉蘭を、辛夷の名で呼ぶのか。

3、辛夷と玉蘭

清の高宗乾隆帝は、圓明園の含韻齋の周圍に玉蘭十餘本を植え、看花の處としたほど玉蘭が好きで¹⁸⁾、「玉蘭」の詩を數多く詠じている。その彼が、玉蘭について庭師に聞いたり、自ら考察したことを、これらの詩に注記しているが、その一つ「含韻齋詠玉蘭作」詩（『御製詩集』三集卷七九）の注に、按ずるに、玉蘭は、辛夷の木に接ぎ木して作る。花師たちはみな云う、「玉蘭〔の原の木〕は白い花が咲くけれど小輪である。それに灌木で、立派な幹の樹にはならない。花を大きく、幹を立派にしようとするなら、辛夷の木に接ぎ木する必要がある。辛夷は、玉蘭を接ぎ木しなければ、もとの紫の花のままである」と。つまり辛夷と玉蘭とは近縁の木なのである。しかるに『羣芳譜』や詩人たちは、辛夷と玉蘭とを、〔清濁を分かつ〕涇水と渭水のように區別し、しかも木筆を辛夷に屬させている。今、〔辛夷と玉蘭の〕二つの花を觀てみると、筆先のような花芽や花の形も同じであり、ただ花の色が紫と白と異なるだけである。木筆の花を白とせず、紫とするのは、私は間違いだとおもう。

（按、玉蘭、取辛夷木本接植之即成。花師皆云、玉蘭雖有白花而小、且叢條不成樹。欲花朵大而成樹、必須取辛夷接植。而辛夷不以玉蘭接之、則仍紫花。是辛夷玉蘭本相近。然羣芳譜及詩人、率別辛夷玉蘭、若涇渭。而以木筆屬之辛夷。今觀二花、尖銳形態畢同、獨紫白異色耳。若以擬筆不與白而與紫、吾以爲不然。）

と言っている。要するに、玉蘭の原の木は灌木（低木）で、花は白いが小さい。今見られるような喬木で花の大きな玉蘭は、辛夷を臺木として接ぎ木したものである。だから玉蘭と辛夷とは近縁の種であって、これを別種として區別する必要はない、というのである。ただ、従来辛夷の別稱とされる木筆を、玉蘭に屬させるべきだとする説は、後に誤りであったと訂正し、従来通り辛夷に屬するとしている（『御製詩集』四集卷一三「辛夷」の注）。

玉蘭が辛夷を臺木として接ぎ木することは、明の宋詡の『宋氏養生部』（樹畜部、種花卉法）「玉蘭」に、「宜しく寄枝（接ぎ木）すべし。寄（接）ぐに木筆（辛夷）の體を用う」と見られる。本来は灌木で花も小さく見端のよくなかった原樹を、辛夷を臺木として接ぎ木することによって、喬木で花の大きな立派な玉蘭に作り上げたのである。その方法が何時の時代から行われていたのか分明でないが、南宋の汪暉の「感興四章」に「一樹の雪花 白きこと玉の如し、辛夷を車と爲し 荷を屋と爲す」（『康範詩集』）、つまり「玉のごとき白き花の一樹は、辛夷を臺木とし蓮のごとき花で枝を覆う」といっているから、南宋のときには行われていた。乾隆帝は、明の周之冕（花鳥畫を巧みとした）が畫いた三十種に及ぶ花卉の圖卷を詠じているが、その内の「辛夷」詩に注して、

「辛夷は屋角に香雪を搏つ」とは王安石の詩であるが、辛夷の花は紫であり、これを香雪とは謂えまい。つまりこの辛夷は、辛夷に接ぎ木した玉蘭なのであり、舊くは玉蘭も亦た辛夷と呼ばれていたのである。（『御製詩集』五集卷三一「題周之冕寫生卷」内「辛夷」）

（辛夷屋角搏香雪王安石詩也。辛夷花紫、安得謂之香雪。可知玉蘭自辛夷接出。舊或玉蘭亦名辛夷耳。）

と、王安石の詩の「白い辛夷」は玉蘭のことだといっている。そのように見て間違いないだろう。唐の白居易の詩の「白い辛夷」も同じと考えてよい。王安石の詩は江西省撫州臨川の辛夷を詠じたものであったが、白居易の詩も彼が江州（江西省九江市）に謫されていた時の詩で、江西省は今日でも玉蘭の分布地である。

いったい「玉蘭」という名が見られるのは宋代から¹⁹⁾である。しかし当初は、必ずしも樹木の玉蘭を指すとは限らなかった。たとえば、北宋末南宋初の李彌遜の「邵文伯得玉蘭於昭亭、持以見遺、因求詩爲作長句」詩に見る玉蘭は、句に「瑤草秀を競い春妍を争う」とあり、「蕙花蘭幹は蘅荃より香る」（『筠谿集』卷一三）とあって、蕙蘭の蘭、すなわち蘭花²⁰⁾（ラン）のことである。また南宋初の樓鑰の「以玉蘭贈王習甫」詩の玉蘭も、句に「一種の香蘭 玉色新たなり」（『攻媿集』卷一〇）とあって、やはり蘭花のことである。それは「玉色の蘭」、すなわち白い蘭との謂いである。この玉蘭に對し、北宋の劉跂が「和定國（王鞏）湖上」詩で「玉蘭桃李 意無きに非ず」（『學易集』卷四）と、桃李と並べている玉蘭は、樹木の玉蘭と見てよい。また南宋の武衍が「宮詞」に「梨花風に動れ 玉蘭香る」（『兩宋名賢小集』卷三三二「適安藏拙餘藁」）という玉蘭も、梨木と花期を同じくする樹木の玉蘭であろう。明代からはもっぱら樹木の玉蘭（ハクモクレン）を指す玉蘭の名も、宋の時には未だそのように定着してはおらず、かえって蘭花を意味することの方が多かった。このような状況からみて、辛夷に接ぎ木されたハクモクレンは、当初は辛夷の名で呼ばれていたと考えてよい。故に唐の白居易は「白い辛夷」と呼んでいるのである。宋代、これに玉蘭の名を當てる者も現れたが、王安石が詠じた拓岡西の街路樹は、當時、なお従来の辛夷の名で呼ばれていたのである。元時代になると玉蘭は、ほぼハクモクレンを指すようになる。たとえば南宋末元初の陸文圭の「亭下玉蘭花開」詩に、「拆けば紅蓮に似て白羽揺れる」（『牆東類稿』卷二〇）といい、元末明初の王逢の「得五妹消息因寄一首」に「階庭の玉蘭の樹、開花は春暮に屬す」（『梧溪集』卷四）とある玉蘭は、ハクモクレンである。

ただ、明代に至っても「白い辛夷」の記憶が失われたわけではない。明初の楊基の「晩春三首」詩に「辛夷は雪の如く庭の柯に照く」といい、嘉靖時の錢穀が、宋の朱長文の「辛夷」詩（『蘇學十題』内）に附記して、

また一種に、花が正白で香りが有り、幹や葉は辛夷と一樣の、辛夷を臺木として接ぎ木したものが、吳中では近來盛んに賞されている。（『吳都文粹續集』卷二七）

としている。また嘉靖間、玉蘭で有名な蘇州の「玉蘭堂」に居た文徵明は、その蔵書印に、「玉蘭堂」（白文印）と共に「辛夷館」（朱文印）の名を用いていた。

ちなみに、今日でも玉蘭は、辛夷を臺木として接ぎ木するが、わが國の場合は、中國の辛夷（唐モクレン）ではなく、日本の辛夷（コブシ）を臺木に用いるという。

四、「木筆」と「迎春」

「木筆」と「迎春」の名は、唐の『本草拾遺』「辛夷」に、「北人は呼びて木筆と爲し」「南人は呼びて迎春と爲す」と、兩者ともに辛夷の別名として登場する。しかし今日では、辛夷（紫玉蘭）を木筆、玉蘭（白玉蘭）を迎春として、これを分けている。

そもそも木筆と迎春とを分けたのは、南宋初の胡仔である。胡仔はその『漁隱叢話』（後集卷一〇）に、

余、木筆と迎春とを觀るに、自ずからはれ兩種なり。木筆の色は紫なり、迎春の色は白なり。木筆は叢生にして、二月に方に開く。迎春の樹は高く、立春に已に開く。

という。すなわち「木筆」は叢生（灌木）で花の色は紫、「迎春」は高樹（喬木）で花の色は白とした。木筆と迎春を區別することはここに始まるが、胡仔は「樹は高く、立春に已に開く」迎春を以て、「然らば則ち辛夷は乃ち此の花なり」と辛夷に當てる。それは唐の韓愈の「感春」詩に「辛夷の高き花 最も先に開く」とあるからであるが、それだと辛夷は白い花ということになる。胡仔が白居易のいう「白い辛夷」を意圖したのだとすれば、「玉蘭」を指すことになり、今日の「玉蘭＝迎春」の説と繋がるが、ただ、韓愈の「感春」詩の辛夷は、紫花の木蘭を指すものであるし、辛夷の花は紫とするのが一般であるから、その真意は量りかねる。しかし、明代中葉の王世懋は『學圃雜疏』花疏に、

玉蘭は辛夷より早し、故に宋人は名づけるに迎春を以てす。今、廣中（兩廣地方）尚お仍ち此の名あり。

といており、この宋人は胡仔を指すのであろうが、明らかに玉蘭を迎春とみている。いずれにしても、以來、玉蘭を迎春とするようになり、清では康熙時の湯右曾が「詠齋中草木五十二首同雪子作」内の「玉蘭」詩（『懷清堂集』卷一九）に、

辛夷は開くや未だ開かざるや、迎春は好き時節なり。邈爾なり姑射の人²¹⁾、肌膚は冰雪の若し。と詠じ、『江南通志』（卷八六、食貨志）揚州府の物産に、「玉蘭、一名迎春花」という。また、いうまでもなく、乾隆帝は玉蘭を迎春としている²²⁾。かくして今日の、木筆は辛夷、迎春は玉蘭の説が成立した。

ちなみに、『本草綱目』に見られる「迎春花」は、これとは別物である²³⁾。

む す び

「紫の花」のはずの辛夷が、白居易の詩に「白い花」として詠われていることから、文献資料に見られる「辛夷」を追ってみた。

今日「辛夷」は、木蘭科木蘭屬（モクレン科モクレン屬）の落葉灌木で、わが国では中国から渡来したことからこれを「唐モクレン」と稱するが、花瓣の内側が白色で外側が紫色（または紫紅色）の、鍾形の大輪の花を咲かせる。辛夷の名はすでに『楚辭』に見られるが、その辛夷が今日の辛夷と同じかどうかは分からない。ただ、當時は木材として（また薬用として）の認識で、花に意識が向けられていたわけではない。その花に目が向けられるようになるのは唐代で、王維や杜甫の詩に見ることができる。以来、辛夷を詠った詩は多いが、ただそれらの辛夷がみな、今日いう「辛夷」と同じではなかった。文献資料に見られる「辛夷」を分けると次の三種となる。①は今日の辛夷（唐モクレン）、②は今日の木蘭（紫モクレン）を含む木蘭類、③は今日の玉蘭（白モクレン）である。①の今日の辛夷を意味する場合は、灌木であることがその分別要素となる。②の今日の木蘭を意味する場合は、喬木であることがその分別要素となるが、花は①の辛夷とほぼ同じである。それはもともと辛夷が、木蘭の変種だからで、故に学名は同一である。③の今日の玉蘭を意味する場合は、花が白色であることが分別要素となる。この玉蘭は、辛夷を臺木として接ぎ木されたもので、故に当初は辛夷の名で呼ばれていた。その接ぎ木された辛夷が、花の美しい白さを強調する名として、宋の頃から次第に玉蘭の稱が当てられるようになって来た。白居易の詩の「白い辛夷」とは、この玉蘭（白モクレン）だったのである。

なお、今日の木蘭がすべて辛夷の名で呼ばれていたわけではない。『楚辭』には、辛夷とともに木蘭の名も見られる。その木蘭は、辛夷と同様に木材としてであるが、いずれにしても辛夷とは別種として認識されていた。その後も、本草書では両者別々に項目が立てられているが、その区別は今日のように灌木と喬木とはなく、辛夷はその花蕾を薬とするもの、木蘭はその樹皮を薬とするもの、という薬に用いる場所の相異を主としていた。故に今日から見れば木蘭であるはずの喬木が、辛夷の項目に入れられている。詩においては、木蘭の名で詠われることもないではないが、その例は少なく、總じて辛夷の名で詠われている。（使用の2圖は『中國高等植物圖鑑』より転写）

注

- 1) 辛夷の名が最初に見られるのは『楚辭』九歌で、「湘夫人」篇に「辛夷楣兮藥房」（辛夷の楣に白芷の房）とあり、「山鬼」篇に「辛夷車兮結桂旗」（辛夷の車に肉桂の旗）とある。後漢の王逸は、この辛夷に注して「香草なり」とするが、この香草の名とする説は宋代には否定され（洪興祖『楚辭補注』卷二「湘夫人」）、以来、樹木の名とされる。もっとも、『楚辭』の辛夷を樹木とする説は、南朝齊梁間の陶弘景にすでに見ることができ（『證類本草』木部「辛夷」に引く「陶隱居」に、「即ち離騷呼ぶ所の辛夷なる者なり」と）、宋代の説はこれに法ったものである。
- 2) 『漢書』（卷八七上）揚雄傳の「甘泉賦」の、唐の顔師古注に「新雉は即ち辛夷なり」とあり、後漢の服虔注に「雉と夷とは聲相い近し」という。ただ、服虔はこれを香草としている。なお『證類本草』は「辛矧」に作るが、これは「辛雉」の誤りとされる。
- 3) 『本草綱目』（卷三四、木部、香木類）「辛夷」に「藏器（唐、陳藏器『本草拾遺』）曰く」として見える。侯桃の侯は「うかがう」意。侯に同じ。
- 4) 5) 『證類本草』（『經史證類大觀本草』を使用）木部上「辛夷」に「陳藏器本草云う」として見える。
- 6) この種の花蕾を曬乾したものを「辛夷」と稱し薬として用いる。この薬名が樹木の名ともなった、とい

- うのである。
- 7) 本草書としては、初唐の『新修本草』木部上品「辛夷」に、「此れ是の樹、花未だ開かざる時、之を收む」と花が見られるが、これは薬として取るべき時期を示したもので、観賞対象としてではない。
 - 8) 例えば宋の『格物總論』（『古今合璧事類備要』別集卷三一、花卉門「辛夷花」所引）に「蓮の花の如くして小さし」というが如きである。
 - 9) この靈隱寺の紅辛夷は、南宋の『咸淳臨安志』（卷五八）花之品に「紅辛夷」の名を挙げ「唐の時、靈隱寺に此の花有り」といっているから、南宋の時には、すでに見られなくなっている。
 - 10) 『太平御覽』卷九六〇、木部、辛夷には「神農本草に曰く」として同文を引く。なお、宋の『古今合璧事類備要』別集卷三一、花卉門、辛夷花に引く『格物總論』に、「辛夷花、木の高さは數尺」とあるが、この「尺」は誤筆である。『證類本草』辛夷に引く「圖經」（北宋蘇頌『圖經本草』）に「木の高さは數丈」とある。
 - 11) 『朱文公校昌黎先生集』卷四。方崧卿の注に、この句は「辛夷の花は、樹の高い所のあるものから順に咲きはじめる」（此爲高處之花先開矣）ことをいうのだとする。しかし、一般に解されているように、「辛夷の花は衆花に先んじて咲く」と見た方がよいだろう。「高き花」（高花）は『五百家注昌黎文集』などでは「花は高く」（花高）に作る。「高花」にしても「花高」にしても、花が高いということは樹が高いのである。
 - 12) 『楚辭』離騷篇「朝阡之木蘭兮」（朝には阡の木蘭を攀る）、また「朝飲木蘭之墜露兮」（朝には木蘭の墜る露を飲む）と。
 - 13) 晉の左思の「蜀都賦」中の木蘭に晉の劉逵が注して、「木蘭は大樹也。葉は長生に似て冬夏榮え、常に冬を以て華す」（『文選』卷四）という。長生とは長生樹、すなわち「冬青」（冬青科冬青屬）のことで、冬も青々としていることから冬青の名がある。つまり劉逵がいう木蘭は、常緑樹なのである。木蘭科木蘭屬には僅かながら常緑樹もあるが、今日種名として「木蘭」と稱するのは落葉樹であるから、これとは異なることになる。
 - 14) 『楚辭』九歌「湘夫人」篇に、「桂棟兮蘭橑」（桂の棟 蘭の橑）とある蘭は、王逸注に「木蘭を以て橑と爲す也」とあって、木蘭の垂木とされる。また梁の任昉『述異記』卷下に、「木蘭洲、潯陽江（江西省）の中に在り、木蘭樹多し。昔、吳王闔閭、木蘭を此に植えて、宮殿を構うに用いる也。七里洲の中、魯班（春秋魯の工匠）が木蘭を刻みて舟と爲す有り。舟、今に至るも洲中に在り」と、建築や造船の木材に用いたことをいう。
 - 15) 『西陽雜俎』續集卷九に「東都敦化坊百姓家、太和中冇木蘭一樹、色深紅。後桂州觀察使李勃看宅人、以五千買之。宅在水北、經年、花紫色」と。なお『太平廣記』（卷四〇九、草木、木花）「木蘭花」に引く『西陽雜俎』は「長安敦化坊」とするが、これは長安の敦化坊の方が有名だったので誤ったのであろう。李渤は東都洛陽に家していた。
 - 16) 『白氏長慶集』卷三一「題令狐家木蘭花」に、「此れ従り時時春夢の裏、應に一樹の女郎花を添うべし」と。
 - 17) 「唐本注」の誤記か。しかし「唐本注」（唐の蘇恭『新修本草』）に「木筆」のことはない。唐の陳藏器の『本草拾遺』に「初發如筆。北人呼爲木筆」（『證類本草』木部上品「辛夷」所引）とある。
 - 18) 『御製詩集』初集卷二二「圓明園四十景詩」内の「西峯秀色」詩の序に「後ち宇（裕性軒を指す）を含韻齋と爲し、周に玉蘭十餘本を植ゆ」とあり、同二集卷四七「裕性軒詠玉蘭」詩の注に「含韻齋は圓明園の玉蘭を賞でるの處也」という。
 - 19) 宋代以前から、女仙名（『太平廣記』女仙「張玉蘭」）や曲名（『北堂書鈔』樂部、歌編「西王母、歌玉蘭之曲」）としての「玉蘭」は見られる。しかし草木名としての「玉蘭」は宋の時からである。なお、『佩文齋廣羣芳譜』花譜「玉蘭」に、「五代の時、南湖中に烟雨樓を建つ。樓前の玉蘭花、瑩潔清麗にして、翠栢と相い掩映し、樓外に挺出す、亦た是れ奇觀なり」とあり、五代の時、すでに玉蘭花の稱があったかのようであるが、これは烟雨樓の創建が五代の〔錢元璪の〕時であることをいったままで、玉蘭花については後の時代のことである。
 - 20) 蕙蘭。『楚辭』九歌「東皇太一」などに見られる「蕙蘭」は香草で、蕙は零陵香（サクラソウ科）、蘭は蘭草（キク科フジバカマ）をいうが、ここにいう蕙蘭はそれとは異なり、「蕙花」「蘭花」（いわゆるラン）

- をいう。蘭花は一莖一花、「蕙花」は一莖五六花で香りは蘭花に劣るといふ。「蘅、荃」はともに香草の名。
- 21) 『莊子』「逍遙遊」篇に「藐姑射の山に神人有りて居る。肌膚は冰雪の若く、綽約として處子の若し」とあるによる。色の白いことをいう。
- 22) 『御製詩集』四集卷二六「詠和闐玉玉蘭花插」詩に附記して、「大抵紫の者を辛夷、木筆と爲し、白き者を玉蘭、迎春と爲さば、則ち花の形色と、開くの遅早と皆な合い、固より犁然として紊れざる耳」といっている。
- 23) 『本草綱目』卷一六、草部、濕草類下の「迎春花」は金腰帶、小黄花ともいい、モクセイ科ソケイ屬の落葉灌木。和名をオウバイ（黃梅。學名 *Jasminum nudiflorum*）といい、2、3月ころに2センチほどの黄色い花を咲かせる。

(本学名誉教授)